

無住禪師と登山狀

伊 藤 真 徹

(一)

無住一円は相州鎌倉の人、嘉祿二年（一一二六）十二月二十八日に生れた。父は頼朝の功臣であつたが、その父亡によつて、彼の生涯は一大旋回をむして仏門に入つた。彼は七十九歳の老年に至つて、この回轆軸となつた父の死を回顧して、

食道武家に生れてその跡を継ぐべきに、而るに先祖父亡の事之れあり、仍つて孤露の身となつて自然に遁世の門に入る。近世の明匠、淨教の祖師に値遇結縁のこと、しゝのし乍ら貧家のことに依る。債ことを思つに、武家の業を継がず自ら貧賤の身となること、多生の宿善に酬う。是れ則ち老子の云える禍は福の依るところ、父亡は則ち道行の因縁なり。かゝる迷物の末葉となれる。悟るべき因縁なるへし、されは迷物となれる。これ悟るへき端なり（雜談集卷一、圖書は和漢混交文）

と逆境を善縁なりと領受した悟境を述べている。悲運の生涯は十三歳鎌倉の僧房に始まつたが、十五歳下野の伯母のもとに退き、十六歳常陸に転じて親族に養はれた。十八歳の時出家難髪し、三井寺の円幸教王房の法橋に俱舎頌疏を学ぶ、法身上人についで玄教、後に奥道上人に止観の法門を学ぶことを得た。二十歳で師匠の譲りをうけて僧房に住し、二十七歳の時法房を律

院となし、二十八歳遁世の身となり、律を學して六七年に及んだ。三十五歳壽福寺に移り悲願長老の下に釈論、四聲を參聽し、坐禪を行じて一年に反はす病を得、三十六歳菩提山に登つて眞言三皇龍流の肝要を相伝し、兼ねて法相の法門の要多を聞いた。その後東福寺開山聖一圓師の門を叩いて、天台の龍頂谷の合行社密道院を受けると共に、大日經義疏、永嘉集、菩提心論、その他肝要の録などについて諸受するところがあつた。

無住は弘安六年（一二八三）沙石集十卷、正安元年（一二九九）聖敗集三卷、正安二年夏鏡一卷、嘉元三年（一二三〇）八十歳の時、長母寺内金剛幢院において雅談集十卷を看わしたことは、広く世に知られている。

長母寺（愛知県西春日井郡山田村）については、寺伝によれば山田重忠の創建と伝へ、重忠については「沙石集」には「山田次郎家重忠は、承久の時君の御方にて討れし人なり、弓箭の道人にゆるされ、心もたけく番量も人にすぐれたるものから、心もやさしくして、民の煩ひを思ひ知り、よろづ侵むる人なりけり」とその人柄を記している。依て長母寺と關係があらざることは知られるが、承久三年（一二二一）に陣歿した重忠建立の寺は、既に半世紀で荒廢したものがある。依て中世における此寺と祖越の關係、祖越を失つた寺院の維持困難な状態を知ることが出来る。即ち無住の速懷によれば

当寺ニ有因縁故歟、相通四十三年、無縁寺常絶煙、衣鉢道具之外無資財、盡世間人心、非人如思合ヘリ

とあり、又

殊朝夕無用心無縁寺、一物不蓄、盜賊恐ナシ、先學強盜寺入、土藏打破テ、物有、聞タレハ

、犬采タニモナカリケルトテ、腹立テ去リ

とあつて、その状が知られると共に、「日本名勝地誌」に「弘長三年（一二六三）無住国師の末錫するに及んで禪泉臨濟派に改め今尚ほ之を奉せり」とある、弘長三年末錫説を略、肯定することが出来る。されど四十三年在住の速懷を基いとし、嘉元三年から逆算すれば、弘長二年始めて末錫したことになる。

(二)

沙石集については、「雑談集」に「先年沙石集、病中ヲカシケニ書散、不及再治シテ、世間ニ披露、譏取相半歟、本意只愚佐、仏法結縁ヲ、存スルハカ也、本末智者ヲ教導セント思、心ナシ、又智者ハ万物性ニ達メ、邪正一如、理モ、善惡不二道モ、其心ヲ得ル事ナレハ、自己ノ智慧ヲモテ、ヨクヨク通メ、感シ思ハム人モ、ナトカナカラムト思心ニテ、病中ニ草^マ之^ヲ」とあり、又雑談集の序文には

如ラ冥相ニソムカズ、然ハ狂言綺語アタナル戯ヲ縁トシテ、仏衆の妙ナル道ニ入レ、世間
浅近ノ戯キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思

とあつて、この故に「徒ナル手ズサミニ、見シ争闘シ争思タルニ隨テ」手にまかせて書集め、愚なる人の仏法の利益、和光の深き心、賢愚各別なること、因果の理を信せぬ者の爲め、仏道

に入り開倍する因縁にもと、
「雑談ノ次ニ、教門ヲヒキ、戲論ノ中ニ、解行ヲ示シたのである。

沙石葉は既に自の意氣によつて筆を染めたものであるが、雑談集においては、

此雑談集、或同法、所望ヨリテ、手ニマカセテ説之、無正体事共、重疊セル事ヲホカル覺、
ハ旬命期旦暮、終、在呼吸、同法尋及後披覽、如面談、思テ、遺誠尋ニ隨順スル事アラハ、至
孝ノ一分ナルヘシ、雜談ト云ナカラ、法門多説之、邪正進知、有智、人披覽アラハ、削、非、添
冠、初心、学人、教誡スル因縁トシ給ヘシ

と述べられてゐる。依て同法の依頼によつて稿を起したものであつて、その製作動機は沙石葉
とは異なるが、その主旨は「ヨク用ル時ハ、在言綺語、誤、酒、耽、讀、弘、衆、因、聖法輪、縁トスル事ナリ」
とあつて、愚を導き迷を改むる因縁とせんとする素意は同一である。かくの如き撰述を可能に
られぬる理解の深遠を知るよるべとして、雑談集に、

愚老貪家ノ因縁、白熱、入通世門、及五十年、如諸修行、有志無力、見性悟道、亦其命空ト
云ヘトモ、久大衆、聖教説、法門、變衆隔ニモ不可忘歟

とあり、見聞の広きこと、亦

年長學問、殊ニハ洛陽諸國、処々、名所、靈寺、靈社、山門、南郡、七、大寺、コトニハ南浮才一、國、大
仏、日本才一、靈驗、能野、生身仏、如ク思エル善光寺、大師御入定、高野、上宮太子、御建立
、弘法取初、四天王寺、并、彼、御誕生、橘寺御建立、法蓮寺御願、如、此靈所、思フサマニ釋之
とあることによつて、その往還に得た知識の広さが伺われる。

念仏禁遏運動は元久の初年から盛んであつて、法然上人はその都度対応の方便を構えられた。即ち内に対しては門弟の自誡を教え、外に向つては念仏が諸宗のさまたけにならぬ開陳であつた。勅伝卷三十二に

上人惣じては生死をいとひ仏道に入べきいはれ、別しては無智の道俗男女の念仏するによりて、諸宗のさまたけとなるべからざるむね、聖覺法師に筆をとらしめ、旨趣をのべられる状

とあるのが、所謂登山状又は元久法語と世稱せられるものである。登山状を輯録するものは望西樗了慧の「拾遺黒谷諸灯録」、及び勅伝であつて、同書は文永年中（一二六四—一二七四）になつたものである。この登山状の前半と殆んど同文と思われるものを、雑談集卷四に「無常之言」として挙げてゐる。雑談集卷四の脱稿は嘉元二年（一一三〇、四）であつて、了慧の寂年正応三年（一一九〇）に遷れること十五年であり、徳治（一一三〇、六—一三〇七）に稿の成つた勅伝に先立つこと二三年である。

登山状が収載せられてゐる話書の成立を年代順に配列すれば左の如くであるが、両者を比較対照することによつて、右樞素樸の比重が知られ、次の如きことが考えられる。

- ① 拾遺黒谷諸灯録から転載したものでない。
- ② 泉型が存在し、それが両者に転用せられた。

③ 泉型は矢張り法然上人に発祥する。

④ 泉型は法然上人以前にあつて、豈山扶製作に当り引用せられた。

江沢諸賢の御叱正を乞う。

(四)

趣常ノ言

金谷ニ華ヲ翫^{の化}テ、^{もてあそぶ}庭々タル春ノ日^をハ、^た空ククラシ、^た或ハ^南西^{あざり}樓^をニ月ヲ弄^{あそ}ビテ漫々タル秋ノ夜^をハ、

イタツラニアケヌ、^{かす}或ハ千里ノ雲ニ走^{はせ}テ、^を山ノカセキヲ取^{とり}リ、^を歳^{とし}ををりく、^を或ハ万里のなみにうかひて、

うみのいろくづをとりにて日をかきね、^に或ハ^に畏寒ノ冬ノ朝ニハ、^を氷ヲシノキテ、^を世路ヲワシ^たリ、^を或ハ炎天

ノ夏ノ日ニ、^{あせ}汗ヲノゴ^ひテ、^を利養ヲ求ム、^を或ハ^{もとの}専子眷辰ニマツハレテ、^を愚蒙ノキツナキリカタ

ク、^{執敵怨縁}或ハ^を怨讎等ニアヒテ、^を賤志ノホムラヤム事ナシ、^を惣じてかくのごとくして、^を晝夜朝暮ハ^を行住坐卧、

時トレテ止事ナシ、^を身三口四ノ過ヲカシ、^を三途八難ノ業ヲカサヌ、^をしかればあるまじきは、^を一日

ハ中ハ八億四千念ハ、^を念母ニミナ三途業とハハリ、^を念マヤ所作皆是三途業とハハリ、^を三途八難ノ業ニ非スト云フ事ナシ、^を如是、^を昨日モ徒ニクレ^をハ、

今日モ^をハ、^を空クアケヌ、^を今フ^を幾度カ暗シ、^を今フ^を何度カアカサムトスル、^を夫レ^を朝ニ^を開ク^をハ、^を終

花^は華^け（ハ）夕^{ゆふ}ノ風^{かぜ}ニ散^ちリヤスク、夕^{ゆふ}ニムスフ命^{いのち}露^{つゆ}ハ朝^{あした}ノ日^ひニ消^{きえ}ヘヤスシ 是^{これ}ヲ不^{しらず}知^ち（ハ）常^{つね}ニサカ
エム事^{こと}ヲ思^{おもひ}フ 是^{これ}ヲ不^{ことごと}悟^{しらず}（ハ）常^{つね}ニ有^{ある}ル事^{こと}ヲ思^{おもひ}フル固^{かた}（ハ）無^む常^{じょう}ノ風^{かぜ}一^{ひと}度^{たび}断^{つぎ}テ有^{ある}爲^{ため}ノ命^{いのち}
露^{つゆ}永^{ながく}ク消^{きえ}ヌレハ 是^{これ}ヲ眩^{くら}野^のニ捨^すテ 是^{これ}ヲ遠^{とほ}山^{さん}ニ送^{おく}ル 露^{つゆ}子^こハ逆^{さか}ニ苔^{こけ}ノ下^{した}ニワリモト 露^{つゆ}子^こハ
独^{ひとり}旅^{りょ}ノ空^{そら}ニ迷^{まよ}フ、妻^{つま}子^こ眷^{けん}蚕^{さん}ハ家^{いえ}ニアレトモ伴^{とも}ナハス、七^{しち}珠^{しゆ}万^{まん}室^{しつ}ハ蔵^{くら}ニミテレトモ益^{えき}モナシ、只^{ただ}
身^みニ隨^{したが}フ物^{もの}ハ、造^{ぞう}惡^ごノ業^{ごふ}、冥^{めい}二^に眼^{がん}ニミテル物^{もの}ハ、後^ご悔^{かい}（ハ）涙^{なみだ}ナリ、逆^{さか}ニ炎^{えん}魔^まノ片^{ぺん}庭^{てい}ニ至^{いた}リヌレ
ハ、罪^{つみ}ノ浅^{せん}深^{しん}ヲ定^{さだ}メ、業^{ごふ}ノ輕^{けい}重^{じゆう}ヲカシカヘラル、法^{ほふ}王^{わう}罪^{つみ}人^{にん}ニ同^{どう}ノ給^{たま}ハク、汝^{なんぢ}法^{ほふ}流^{りゅう}布^ふノ世^よニ生^{なま}
レタリキ、何^{なん}（ハ）修^{しゆ}行^{ぎやう}セサシメいたづらに歸^{かへ}リきたるやと、その時にわれらいかがこたへんとする、すみやかに 出^で要^{よう}不^ふ
求^{もと}（ハ）めて、むねしく三^{さん}途^とに歸^{かへ}る事^{こと}なけれ 柳^{やなぎ} 一^{ひと}代^{だい}諸^{しよ}教^{ぎやう}ノ中^{うち}ニ、（顯^{けん}宗^{そう}）大^{だい}衆^{しゆ}小^{せう}衆^{しゆ}、権^{けん}教^{ぎやう}真^{しん}教^{ぎやう}、顯^{けん}宗^{そう}
密^{みつ}宗^{そう}、論^{ろん}家^か釈^{しやく}家^か、部^ぶハ宗^{そう}ニワカレテ、義^ぎ才^{さい}差^さニ連^{つら}レリ、或^{ある}ハ万^{まん}法^{ほふ}皆^{みな}空^{くう}ノ旨^しヲ説^とキ、或^{ある}ハ諸^{しよ}法^{ほふ}空^{くう}
有^{ある}ノ心^{しん}ヲ明^{めい}セリ、或^{ある}ハ五^ご性^{しやう}各^{かく}別^{べつ}ノ義^ぎヲ立^たテ、或^{ある}ハ悉^{しつ}有^{いう}仏^{ぶつ}性^{しやう}ノ言^{げん}ハヲ談^{だん}ス、宗^{そう}々^々ニ究^{きう}竟^{ぎやう}至^し極^{ごく}ノ義^ぎ
ヲ諍^{しやう}ヒ、各^{かく}各^{かく}ニ甚^{しん}深^{しん}ノ正^{しやう}義^ぎノ旨^しヲ論^{ろん}ス、皆^{みな}ナ是^{これ}レ終^{しゆう}論^{ろん}ノ実^{じつ}理^り也^{なり}、亦^{また}如^{ごと}来^{らい}ノ金^{きん}言^{げん}也^{なり}、或^{ある}ハ機^きヲ調^{てう}
ヘ（ハ）是^{これ}ヲ説^とキ、或^{ある}ハ時^{とき}ヲカ、ミテ此^{これ}ヲ教^ぎヘ（ハ）何^{なん}カ浅^{せん}何^{なん}カ深^{しん}トモ、（ハ）是^{これ}非^ひヲワキマ
ヘカタシ、彼^{かれ}モ教^{ぎやう}是^{これ}モ教^{ぎやう}互^{たがひ}ニ偏^{へん}執^{しやく}スヘカラス、説^とノ如^{ごと}ク修^{しゆ}行^{ぎやう}セハ、皆^{みな}悉^{しつ}ク生^{しやう}死^しヲ過^か度^どスヘシ、

法ノ如ク(一)行セハトモニ同ク(おなじ)吾提ヲ証得スヘシ。修セス(して)學セスシテ(い)徒ニ是非ヲ論ス(す)

レハ(たとへば)、首シ(く)ニナルモノ、色ノ茂深ヲ論シ、耳シ(み)ニナル者ノ声ノ清濁ヲイハムカ如シ、(こと)

たゞすべからく修行すべし。いづれも生死解脫のみちなり、しかるにいまかれを學する人はこれをぞおみ、これを誦する人はかれ

をぞしる。愚鈍のものこれがためにまどひやすく、我々の身これがためにわきまへかたし。(たまく) 一法ニ趣テ功ヲツマムト(おもむき)

スレハ、即諸京ノアサケリ互ニキタル、広ク諸教ニワタリテ義ヲ達セント思エバ、一期ノ命ク(おもち) 談(だん) 命ク(おもち)

レヤスシ、カノ蓬萊方丈瀛州ト云ナル三ノ山ニコリ、不死ノ藥ハアリト聞ケ、彼ヲ服シテ(まれ)

命ヲ延テ漸々ニ習學セハヤト思エトモ、尋又ヘキ方モヲホヘズ、唐シニ秦皇夫ト廟ヘ給シ御門(もく)

、是ヲ廟(みや)ニ尋ニ遣シ(つかは)カト(た)、童男臥(ふ)サハ、船ノ中ニシテ徒二月ヲ送りキ、彭祖力七百(ちやうそ)

載(の)法(は)、昔シカリニシテ、今ノ時(いま)に(に)伍ヘカタシ、曇鸞(だんらん)、法師と申し人こそ、仏法のそこをさめたりし

人のいのちはありたを期しめたりとて、仏法をならはんがために、長生の仙の法をはつたへたまひけれ。時に、吾提流文(とちりゅうぶん)と申三

藏(ざう)ましまし、皇宮(きうきう)かの三藏の御まへにまうてて申給やうは、仏法の中に長生不死の法、この上の(に)仙經ヲ以テ(い)遇時(ぐとき)、吾提(とち)

流文(りゅうぶん)世ニツワキ(は)ハイテ(の)給(おほ)は、(この方にはいづくのあたにか長生の法ありん) 經(きやう)ハ長年ナリトモ、遂ニ(つい)

ハ三有ニ輪廻スト(の)結(むす)テ(すなはち)觀(くわん)、(無量壽)經ヲアタヘ給フ、其ノ後爭エノ教ヲ修ス、(大山法也)

これによりて修行すれば、さらに生死を解脱すべしとの給き、曇鸞これをつたへて、仙聖をたちまちに火にやきてこれをすつ、観無量壽によりて淨土の行をしるし給き、そのうち曇鸞、道綽、善導、懷慈、少康等にいたるまで、このながれをつたへ給へり、そのみちをおもひて、いのちをのべて大仙の法をとらんとおもふに、又道綽禪師の涅槃集にも、聖道淨土の二門、たて給ひはこの心なり、その聖道（門といふは）

是レ穢土ニ（し）テ煩惱ヲ断シ（て）、菩提ニ到ル也、淨土門ト云ハ、淨土ニ生レテ（かこにて）煩惱ヲ

断シ（て）菩提ヲ証スル也、今（この）淨土門ニ三福ノ行アリ（又觀至にあかすところの業因一にあらず、三福九品十三定

善、その行一なるにわかれて、その業まちくにつりなれり、まづ定善十三觀といふは日想、水想、地想、空想、宝樹、宝地、宝樓、花座、妙想、真

身、觀音、勢至、普觀、雜觀これつぎに散善三福といふは、一には孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業、二には受持三師、具足衆戒、

不化威儀、三には發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行有也、九品ほかの三福の業を明してその業因にあつ、つぎには觀至に見えたり、総じ

てこれをいへば、定散二善の中にもれたる往生の行はあるべからず、これによりて或はいつれにもあれ、たゞ有縁の行にあつて功をかかぬて

各心ノヒカム（ん）ニ應テ修行スベシ、十三阿若九品アリ、空門ヲ修セムトスレハ（みなことごとく往生

をとぐべし、まじにうたがひをなす事なかれ、いましばらく自法につきてこれをいひは、まことにいま定善の觀門はかす／＼につらなりてすしあり、

散善の業因はまちまちにわかれて九品あり、その定善の門にいらんとすれば、即意ノ男アレテ六塵ノ境ニハス、彼ノ散善ノ

門ヲ望ムムトスレハ、（又）心ノ猿遊テ十惡ノ趣ニウツル、彼ヲシツメントスレバモ不（得ず、これをどうの

んとすれどもあたはず。(コ)、二今下三品ノ業因ヲ見(レ)ハ十惡尋ナリ云云

となへて往生すとされたり、これなんぞわれらが分にあらざらんや、我ノ雄俊ト云シ人ハ、七度還俗ノ惡人也、獄

率炎窟ノ方(ニ)ニ斗示行(一)テ、南閻浮提第一ノ惡人、七度還俗ノ雄俊、速ニ無間ニ墮スヘキ也、あてまいりばべりと申しければ

雄俊申ては、我往生ニ觀無量壽經ヲ見ニ、五逆ノ罪人(一)阿彌陀ほとけの名を十声念仏シテ(一)往生

ス(一)と、我(七度還俗すと)いへともいまだ、五逆ヲ(一)ソクラス、善業スクナシトイエトモ、念仏十声ニスギ

タリ、(雄俊)俊若地獄ニ墮ナバ、三世ノ諸仏長語ノ過ニ墮(一)ヘシト、高聲ニサケヒシカハ、法王理

ニコレテ、王ノ冠ヲ懷テ是ヲ礼シ、ちかによそ弥陀ハ猶ニ依金蓮迎給キ、いはん死ヤ我尋還俗ニヲヨハス(一)

いはんや二形念仏せんをや、男才賈賈、行住坐臥念仏センニヲイデヲヤ、をえはす時又諸佛を論せず是を修するにかたからず、乃至臨終に往生を願求するにその

たよりをえたりと、サレハトラ惡業ヲ造レトニハ非ズ。(已上)

(注記)

勅伝の登山坂の匹敵する文との対比であつて、
(一)の記号は両者の又けたる部分を表わす、
——の記号は勅伝との異なる文字を表わす、

本文は片假名交り文であつて、原文にメとあるはシテと書き改め、井、せ等は
斗、セと一た。